Ryunan Spirit

校長通信
R6.02.27
Vol.50

【私たちは決して忘れない…　能登の人たちへ思いを込めて！！】

昨日の「こころ」にあった伊藤君の文章をもう一度紹介します。

もうすぐ能登半島地震から二ヶ月がたちます。発生当日を昨日のように思い出し、あっという間に二ヶ月たったという印象です。東日本大震災の時に一歳半だった私にとって、今回の能登半島地震は、初めて記憶に残る大地震でした。ニュースや新聞で見る地震の報道は衝撃的で、地震の怖さを改めて知る機会となりました。

流山市と能登町は姉妹都市となっていることは、皆さんもよく知っていると思いますが、どういういきさつでそうなったのかを自分なりに調べてみました。能登町となる合併前の内浦町では能登杜氏という酒造りの職人がいました。その方々が日本各地に酒造りに出かけられ、流山市の酒造会社に杜氏として勤められたのが縁で、流山市に移住する方が多く、昭和初期から交流があったそうです。そして更に親交を深めるため、二〇一二年一月に姉妹都市となりました。二〇一一年の東日本大震災時は締結前であったにもかかわらず、能登町から「海洋深層水」が流山市の乳児のいる家庭に届けられました。形だけではなく昔から関わりがあったこそ、真の交流があったのだと思います。南部中では募金活動や文房具の寄付などで支援を行ってきましたが、毎週金曜日のオクリンクの配信で、他にも方法のあることを知りました。例えば現地に行かなくても支援ができるということです。流山のスーパーでも北陸フェアをしているチラシを見ました。その地方の商品を買うことが支援につながるそうです。

時間が経てば経つほど地震報道が減り、復興が順調に進んでいるように感じてしまいますが、実際はそうではありません。地震発生が一月一日だったことから、毎月一日を能登地震を思い出す日として、被災者の方々に心を寄せて、災害の備えとともに自分にできることを考える日にしたいです。

原文のまま、全てを載せさせていただきました。私もこの休み中、復興支援のための研修会（参加費を全て被災地へ寄付する会）へ、仲間たちと共に協力してきました。全国からON-LINEも含めてたくさんの方たちが参加してくださり、学びの輪を超えて、支援の輪が更に広がりを見せました。伊藤君が書いてくれたように、私たちは決して忘れてはならないと思います。時間の経過とともに報道も少なくなる。しかし、未だにライフラインさえ十分ではない。報道されている地区には支援も集まりやすいけれど、そうでない地区にはなかなか届かない現状があるのです。自分たちにできることを、できる範囲で行っていこうとする気持ち。これこそがとても価値あることだと思うし、大切にしていきたいと思います。

日本はいくつかのプレートがぶつかっているところにあり、地震は避けられないものです。いたずらに恐怖心を持つことはないけれど、備えはしっかりしておきたい。みんなはまず心構え、いざという時にどうすべきかという約束を家族としておくことも大切です。『いざは常なり』こんなところにも、この言葉が大切になるのではないでしょうか。

昨日から強く冷たい風が吹き、いろいろなところで事故も発生しています。皆さんも十二分に気をつけてくださいね。ただ、こんな天気の変化は、一歩ずつ春が近づいている証拠でもあります。『三寒四温』という言葉は知っていますか。冬に寒い日が三日続いたら四日は暖かい日が続くということですが、日本では春の訪れを表す言葉としても使われます。間もなく三月、少しずつですが春は確実にやってきます。新しい季節に向けて、お互い準備をしっかりとしておきたいですね。三年生を送る会、楽しみにしています！！